

『時が良くても悪くても』 2テモテ4:1-8

4:1 神のみまえと、生きている者と死んだ者とをさばくべきキリスト・イエスのみまえで、キリストの出現とその御国とを思い、おごそかに命じる。

4:2 御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。

4:3 人々が健全な教に耐えられなくなり、耳ざわりのよい話をしてもらおうとして、自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め、

4:4 そして、真理からは耳をそむけて、作り話の方にそれていく時が来るであろう。

4:5 しかし、あなたは、何事にも慎み、苦難を忍び、伝道者のわざをなし、自分の務を全うしなさい。

●序論

この手紙は、自分の死が目前に迫っていることを知ったパウロが、若い伝道者テモテへ、励ましと使命感を鼓舞する言葉を書き送ったものでした。

この手紙はただテモテに読まれることだけを想定したものではなく、迫害が激化する教会で回覧されることを想定したもののした。

東西ドイツが統一された、その時に大統領となったヴァイツゼッカーという人（1984-94）は、「言葉の政治家」と言われた人であったそうです。

当時、ドイツの人たちは、敗戦の後、それまでの「アウシュビッツ」に象徴される暗い歴史のせいで、「われわれは永遠の罪人なのか」という、責め立てられる罪に、うめき声を上げていたという時代です。

…彼の言葉は、その若い人たちに次の時代に目を向ける願いで、その言葉を締めくくっているのです。

「互いに敵対するのではなく、互いに手を取り合って生きていくことを学んでほしい」「我々政治家にもこのことを肝に銘じさせ」「範を示してほしい」と。

これらの言葉によって、歴史の中で加害者として罪責感に苦しむドイツの人たちの顔を未来に向けさせ託したのです。そして全世界の人たちの感銘を呼んだと言われます。

さて、私たちはわたしたちの時代を遡ること約2千年ほど前に語られた聖書の中から、イエス・キリストの福音の言葉を聞いています。

すなわちこの言葉に教えられ、罪を知りました。けれども、この同じイエスさまを通して、赦しを聞き、救いの確信へと導かれているのです。そうして自分の未来に希望を持つことができるようにされているのです。

●本論

I. ここで人生の土台が問われる

4:1 神のみまえと、生きている者と死んだ者とをさばくべきキリスト・イエ

スのみまえて、キリストの出現とその御国とを思い、おごそかに命じる。 4:2 御言を宣べ伝えなさい。

語るパウロの背景、そしてそれを聞くテモテの置かれた現場には、し烈な迫害など、「困難な時代」の現実がありました。

しかし、パウロはそのことで心を乱されずに、それよりも、神御自身に目を向けさせることで、神の約束の言葉をここで繰り返します。

①「神のみまえて、生きている者と死んだ者とをさばくべきキリスト・イエスのみまえて」 ②「キリストの出現とその御国とを思い」 ③厳かに命じる

神さまは、現実です。ひとり子イエス・キリストの十字架で表された犠牲の愛と復活の勝利は、歴史上の事実です。そして約束された、キリストの再臨と信じる者に与えられる永遠の御国はすべてにまさる現実なのです。

だからこそ、パウロは厳かに、テモテに伝え、励ますことができた。

「御言葉を宣べ伝えなさい！」と。

「厳かに」とは、身が引き締められるほどの重みをもって語られたということです。

日本で行われたヴァイツェッカーさんの通訳者が言いました。。

ヴァイツェッカーさんの言葉に「迫力」があるのは、「真実の重み」があるからでしょう。それを支えているのがキリスト教信仰のようです。

ハレルヤ！わたしたちはどれほど、わたしたちは素晴らしい福音にあずかっているか。聖書の御言葉に、神の約束に、「真実の重み」があるのです。

それにどれだけ身を寄せ、またそれを確かな自分の人生の土台としているか、パウロの言葉からテモテに、そして私たちに迫るのです。「御言葉を宣べ伝えなさい！」と。

Ⅱ. ここで寛容な心が問われる

4:2 御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。

この「時」というとき、それは、政治的、経済的、また環境や状況、健康について、その時の良し悪しが想像できるでしょう。

そこで、ひたすら「寛容な心で教えて、責め、戒め、勧めなさ」という経験です。新共同訳聖書では「忍耐強く、十分に教えるのです」とある通りです。

御言葉をめぐる心の態度は、この「忍耐強さと寛容」というものが大切です。

それは、相手を打ち負かすためでも、否定するためでもありません。共に生きている人の権利と尊厳を尊重することによって語るのです。つまり「あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。」ということです。

かつてキリスト教の宣教の歴史の中で、未開の地をキリスト教化するというスローガンの下で、そこにある歴史や文化をすべて打ち消し、自分たちの価値観や文化を入れて、自分たちの西洋的キリスト教で征服しようとするような事が行われていたこともあります。

一方聖書が語りイエス・キリストご自身もそしてパウロも大切にしていたのは、「あくまでも寛容な心で」「忍耐を持って」ということです。

イエス・キリストは、その出会う人たちの人生を否定しません。「あなたはこうに変わるならば救われる」と語ったものではありません。

マルコ2:16-17

パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちと食事を共にしておられるのを見て、弟子たちに言った、「なぜ、彼は取税人や罪人などと食事を共にするのか」。イエスはこれを聞いて言われた、「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。

その人たちと出会い、その人たちのそのままの場所で、状況の中で、神様の恵みと福音を説き、そして愛された。その人の人生をリスペクトがあったということです。

キリストは罪をいい加減にほおっておかれたのではない、ご自身の身にすべてを負い、その罰を十字架で身代わりとして受けてくださったのです。そこに生きる人たちの人生を否定するためではなく、受け取り、そしてゆるしを与えるためです。

だから、福音を宣べ伝えるとうとき、そこで、聞き手にこのキリストが見えるように、「あくまでも寛容な心で忍耐を持って」教え続ける伝え続けることが大切だと語られていることを大切に覚えましょう。

Ⅲ. その時に心を備える

4:3-4 人々が健全な教に耐えられなくなり、耳ざわりのよい話をしてもらおうとして、自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め、そして、真理からは耳をそむけて、作り話の方にそれていく時が来るであろう。

ここで注目する「時」というのは、恵まれた時ではありません。宗教的ポピュリズムというのでしょうか、「自分勝手な好みに任せて教師たちを寄せ集め」とあります。

主にある教会では、そうであってはいけません。神と神の言葉に忠実であることが大切な指標になるのです。

「健全な教え」は、わたしたちを本当に意味で、神さまに従うしもべにしてくれます。
2テモテ3：16-17(LB)

神の靈感によって書かれた聖書は、何が真理であり、何が悪であるかをよく教

えてくれます。また、私たちの生活をまっすぐにし、正しいことを行う力を与えてくれます。こうして神は、私たちをあらゆる点で整え、どんな良い働きをも行う力を、十分に与えてくださるのです。

●最後に) ここで再献身が問われる

先日、CBCフェスタの礼拝を見ました。その中で、最後に献身への招きがありました。

言われたいたことはこうです。

「神学校が皆さんを神さまのしもべにできると思ってこないでください。あなたを召すことのできる方、あなたを神さまのためにふさわしくしてくださる方は神さまだけです。わたしたちはそのためにお手伝いをしたい。

もしきらびやかな奉仕を慕い、世の中の栄光や自己実現を想って神学校に来る人はもう一度考えてください。この道は苦労が多いです。

でもキリストに仕えることは、何にも勝って素晴らしい。

人の人生が神さまに触れられて変わっていくことを目撃して、そのために仕えることができることは、何にも勝った栄光です。」

パウロから後輩伝道者への励ましの言葉にこうあります。

4:5 しかし、あなたは、何事にも憤み、苦難を忍び、伝道者のわざをなし、自分の務を全うしなさい。

伝道者のテモテに対しては、「伝道者として」でした。もし、あなたが「祈り人」であるならば、「祈り人として」「とりなし人として」です。

さらに、さまざまな時間や賜物をいただいた奉仕者として、…です。

先ほどのメッセンジャーはこう言いました。

「…でもキリストに仕えることは、何にも勝って素晴らしい。

人の人生が神さまに触れられて変わっていくことを目撃して、そのために仕えることができることは、何にも勝った栄光です。」

それは、伝道者だけの喜びや栄光ではなく、皆さんも共にできる、主の栄光であることを知ることができるからです。